

Title	ジョン・デューイの教育思想における経験概念：デューイ教育思想研究序説
Sub Title	The concept of experience in the educational theory of John Dewey
Author	松丸, 修三(Matsumaru, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976.),p.73- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000016-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジョン・デューイの教育思想における経験概念

—デューイ教育思想研究序説—

The Concept of Experience in the Educational
Theory of John Dewey

松丸修三
Shuzo Matsumaru

I. 問題としての「経験」

教育思想の歴史を瞥見してみると、歴史上の思想家の多くが、教育と経験との間に何らかの関係を認め、様々な形で経験を問題にしてきたことは言うまでもない。ロック (J. Locke) においては、所謂、本有観念 (innate ideas) という考え方に対する反論として経験が問題にされたのであり、教育において経験を欠くことは、「あたかも太陽の光を欠いてローソクの光で満足するようなもの」¹⁾ と述べたヘルバルト (J. F. Herbart) も、教育上、特に「教授」(Unterricht) という観点から経験を問題にした一人であった。

本稿の課題であるジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) もまた、教育との関連で経験を問題にした思想家である。しかし、デューイの経験観、或いは教育と経験との関係の捉え方と、前記の思想家のそれとを比較した場合、そこに際立った差異を認めないわけにはいかない。ロックは、「経験に私たちのいっさいの知識は根底にもち、この経験からいっさいの知識は由来する」²⁾ (『人間知性論』) との立場にたっているにもかかわらず、教育論においては、「われわれの最高、最重要の心的能力」としての理性の開発に、最大の関心と注意力とが払われる価値があることを高調している。³⁾ (『教育に関する考察』) 他方、デューイにおいては、ロックにおけるこのような経験と理性との分裂は、根本的に斥けられている。またヘルバルトにおいては、経験は一面において私たちの生を硬直させる傾向をもつものとして、経験の発展性について十分な認識があったとは思われない。しかし、デューイは経験を、生き生きとした現実的

形態において実験的なものとして捉えているのであり、彼にとって、経験の発展性は十分に信頼に足るものであった。

こうしてデューイの場合は、独自の経験観に基づいて、教育上、経験に積極的意味を与え、教育と経験を密接に結びつけた教育思想を展開しているのである。既に、デューイ教育思想の予言的著作といわれる「私の教育信条」(1897年)において確言した、「教育は経験の連続的な改造として考えられなければならない」⁴⁾ との信念は、さらに『民主主義と教育』(1916年)において、「教育とは、経験の意味 (the meaning of experience) を増し、またその後の経験の方向を指導する能力を増大させるように、経験を改造し再組織することである」⁵⁾ との学術的定義として発展している。デューイにとって、教育と個人の経験との間の関係は、不変の有機的な関係構造であるとの前提があったことは勿論のこと、「経験は、硬直した閉鎖的 (closed) なものではない。それは生命的 (vital) であり、それ故に成長している」⁶⁾ との見解から、あくまでも経験の解放という立場を固持し、教育を、「日常の経験に内在する可能性の知的に指導された発展」⁷⁾ として扱おうとするのである。デューイは、このような見地から、自己の教育理論を「経験の、経験による、経験のための成長 (a development within, by, and for experience)」⁸⁾ に関する理論として展開したのであった。

ところで、このような概観を試みるとき、「経験」は、デューイの教育思想において中心的位置をしめる概念であるとともに、彼の教育思想が、特異な経験観を基底にして構成されていることを認めないわけにはいかない。

このような事情から、本稿では、デューイ教育思想研究の序論として、デューイの経験の捉え方、経験概念の特徴をつとめて明らかにしておきたいと思う。⁹⁾

II. 伝統的経験観とその問題点

デューイの経験概念は、それがいかに特異な性格をもつものであれ、伝統的経験概念との連続を断ったところにうまれたものではない。デューイの心底には、異なった精神的産物を調和させようとする意図があるのであり、このような意味では、デューイは、伝統的経験観における妥当な部分の導出という方向を保持しながら、伝統的経験観の批判的総合を試みているとみることができる。

そこで、デューイの提出した経験概念そのものを検討する前に、その手懸として、デューイが伝統的経験概念をどのように捉え、どこに問題を見出したのかを明らかにすることから、本稿をはじめたい。

この点に関して、デューイは「経験主義の経験的検討」(An Empirical Survey of Empiricisms, 1935年)において、彼に先行する代表的な経験観として次の二つの典型を挙げ、それぞれの経験概念を分析するとともに、それらの経験概念の問題点を究明している。

(i) 古代ギリシア以来の伝統的経験概念

同論文で、デューイが第一に挙げている典型は、古代ギリシアに起源をもち、様々な形で 17 世紀まで続いてきた経験概念である。

古代ギリシアの経験観は、プラトンやアリストテレスのそれに代表されるであろう。デューイの解釈によれば、プラトンにおいては、経験は、理性や知的コントロールによってではなく、過去の偶然的試みの反復によってつくられる慣習に基づいた知識や技術の蓄積として捉えられ、経験は、合理的理解を意味する科学と明確に对照されているという。¹⁰⁾ 従って、言い換えれば、プラトンにおいては、経験は出来事の知的洞察を欠き、「慣習が持つ限界のすべてを背負う」¹¹⁾ もの——「過去へ隷従するもの」¹²⁾ として、軽蔑の意味をこめられていたと言ってよい。更にデューイは、アリストテレスの経験観がプラトンのそれとはかなり異なっていることを指摘しながらも、プラトンにはじまったこのような経験軽侮の傾向を、アリストテレスにおいても認めている。デューイによれば、両者は、「経験を全く実際的な事柄とみなし、それ故に、経験の目的は物質的関心であり、経験の機関は身体であるとみなす点では一致している」¹³⁾。

このような吟味から、デューイは、古代ギリシアにお

ける経験観には、次の三つの大きな限界があることを指摘する。¹⁴⁾

- (1) 経験的知識(厳密に言えば、知識ではなく信念や意見に過ぎない)と科学とを対照させている。
- (2) 合理的思考の自由な性格と、実際行動の制限的、従属的性質とを対照させている。
- (3) 従って、前二者の限界は、結局のところ、経験を軽侮する意味を含んでいる。すなわち、「感覚および身体的活動は現象界に限られているが、理性は、その固有の本性においては究極的実在と同類である」と考えられており、理性が重んじられている。

デューイの眼をもってすれば、古代ギリシアにおいては、経験は「実行的意味」(the practical meaning)をもつものであった(デューイはこの点を高く評価する)が、しかし、経験と理性、科学、真の知識とを対照させ、経験は過去へ隷従するものとして軽蔑の意味がこめられていたところに、根本的問題がひそんでいた。

(ii) イギリス経験論の経験概念

次にデューイが挙げている経験観は、ロックなどを代表者とするイギリス経験論における見方である。

プラトンやアリストテレスにみられるような経験軽侮の傾向は、長い間に亘って、それ以後の見方に決定的な影響を与えてきたとみることができる。しかし、デューイによれば、ベーコン(F. Bacon)やその後継者たちになると、上にみたような見方に逆転が生じてきているという。すなわち、プラトンにおいて「改革、進歩、統御の増進の原理」¹⁵⁾を意味した理性は、「保守的で精神を隷属させる要因」¹⁶⁾に、これに対して、経験は「新鮮なもの」とみなされ、精神を解放する力になった。また、自然が何ものであるかを発見するには、必ず経験を必要とすると考えられるに至った。こうしてデューイは、近世の思想家においては、「理性、普遍的原理、先験の概念は、その意義と妥当性を得るために、経験、つまり感覚的観察によって満たされなければならない空虚な形式」¹⁷⁾を意味することになったと指摘している。

こうした経験と理性との間の逆転劇は科学の発展に伴って生じてきたものであるが、ただ、イギリス経験論においては、こうした変化が、経験を認識の方法とみる方向に発展させられたのは周知の通りである。デューイは、イギリス経験論の見方では、経験は「知的で認識的なもの」と捉えられ、「推論(reasoning)の働きを安定させて調節する材料を理解すること」¹⁸⁾を意味するものとなったと明快に指摘する。

更に、イギリス経験論の経験観の基本的特徴を、経験

を認知的なものとして捉えるところにもとめたデューイは、イギリス経験論のそのような性格の故に、そこに問題性を見出している。デューイの文脈にそって、まず第一に指摘しなければならないのは、イギリス経験論の見方では、経験の労働性に力点が置かれていることである。ロックにおいては、経験は感覚或いは反省という二つの窓を通して人間の心に入ってくるものと考えられているのであって、その場合、感覚的「印象の感得における受動性」¹⁹⁾ (passivity in reception of impressions) が強調されている。受動性の強調は、このグループに属する他の哲学者においても同様である。結局デューイは、経験の実行的意味或いは能動的側面を無視した点、換言すれば、精神を受動的なものとみなし、経験の受動的側面のみを強調した点を、イギリス経験論の経験観の根本的問題としているのである。また第二に、経験はそれぞれ分立的なものと考えられていて、それ自身に結合性、組織性を内包したものとまでは考えられてはいない。それ故に、これを結合するものとしての理性の必要を否定することができない。すなわち、「世界を創造し構成する理性、という古い伝統」²⁰⁾ を脱脚できてはいない。

これらの問題点は、デューイによれば、究極的には、ある意味で経験科学の進歩と相俟って発展してきた筈のイギリス経験論が、その実、経験科学に対しては表面的な賛辞を与えているだけに過ぎず、経験科学の精神に充分に基づいた経験の理論を提出していないからにはほかならない。

III. デューイの経験概念

このように、デューイの眼を通して、二つの伝統的経験観の問題点を一瞥してくると、それらの伝統的経験概念とは際立って異なったデューイの経験概念が、いかなる特徴をもっているのかは、デューイが見出した上述の問題点との対照において、ある程度予測しうるであろう。そこで次に、特異なデューイの経験概念をもたらした要因は一体何であったのかを明らかにした上で、デューイの提示した経験概念を検討しよう。

(i) 経験概念変化の要因

デューイが、伝統的経験概念とは異なった新しい経験概念を構成した要因としては、次の二点が挙げられる。

第一の要因は、デューイが過去の経験概念を祖上に載せることができたその事由に関して、或いは、伝統的経験概念とは異なった新しい経験概念を構成する必然性についての、デューイの見解に関して存する。この点に関して、デューイには、「経験についての思想は、現実に

生じた経験の後に続くもの、それをモデルとして形成される」²¹⁾ ものである、例えば、古代ギリシアにおける経験概念は、「実際に古代ギリシア人の経験であったものの説明」²²⁾ にほかならない、との考えがあったことを指摘できる。デューイは、現実の経験の質をモデルとして経験概念の再構成を要求しているのであり、またこのようにして再構成された経験概念を判断の基準として、過去の経験概念の問題点を明らかにしているのである。では、デューイは具体的に何をモデルとしたのか。端的に言えば、それは17世紀以来急速に発達してきた経験科学の実験的研究方法であった。科学の方法をモデルとして捉えたこと、それが経験概念変化の第一の要因である。以下において明らかにするように、デューイは、科学の方法をモデルとすることによって、経験を実験的構造をもつものとして捉え、また、経験は構成的に自己調整を行なう、との新しい経験観を構成している。

第二の要因は、「生物学に基づいた心理学の発達」²³⁾ である。すなわち、内観的な心理学から、生物学的観点を取り入れた心理学への変化である。デューイは、生物学或いは生物学を基礎とする心理学に依存して、経験を、生命過程 (life-process) の一部とみる科学的定式化を試みている。

(ii) デューイの経験概念の特徴

では、こうした新しい背景から、デューイは経験をどのように捉えたのか。デューイの提示した経験概念に、どのような特徴を認めることができるのか。

デューイは、「哲学の復興の必要性」(The Need for a Recovery of Philosophy, 1917年)において、自己の経験概念と伝統的経験概念とを対比させ、彼の経験概念が主として五つの点で後者と異なっていることを明らかにしている。²⁴⁾ ここでは、それらの五点を順次取り出すことによってデューイの経験概念の分析を試みることにしたい。(尚、これらの五点に関して、便宜上簡単な小見出しをつけるとともに、同論文におけるデューイ自身の説明を、要約して付記しておく。)

①環境との相互作用としての経験

経験とは、「有機体と、自然環境および社会環境との相互作用に関する事柄」である。

デューイの言う経験は、単に知識の唯一の根源といった認知的なものではない。『経験と自然』(1925年)において主張されたところに従えば、経験は自然と連続したものである。また、日常の生活を意味するものでもある。デューイは、このようなプラグマティストに一般的ともいえる姿勢に、さらに生物学の諸成果を有効に利用

することによって、自己の経験概念を確立している。一言をもってすれば、この新しい科学的定式化の特徴は、経験を生命過程の一部とみるところにある。

発達した生物学は、生物進化の事実を発見するとともに、次のことを教えてくれる。有機体は環境によって一方的に形成されるもの——外からの作用を受動的に待機しているもの——ではなく、有機体が有機体として生命を持続していくためには、環境に動きかけ、環境のある要素を変形する。「その結果、環境に生じた変化が有機体とその活動とに反作用する。こうして、有機体は自分の行動が生んだ結果に出会い、その結果をうける。」²⁶⁾ デューイは、このことを根本的事実として、彼の経験観の基本的前提としている。結局、デューイは、「経験の本質は、生命の必須的諸条件 (the essential conditions of life) によって決定される」²⁶⁾ とみなし、しかも、環境との「相互作用は自然的存在の普遍的性格」²⁷⁾ と認めることにより、人間の経験を（人間もまた自然的存在であるが故に）この相互作用の発展、つまり「能動と受動との密接な結合」²⁸⁾ として説明している。またデューイは、「有機体と環境との相互作用が、環境の利用を保障する適応をもたらす」²⁹⁾ ことを根本的事実として、この能動と受動との結合の過程を、環境との適応的調整の過程と主張する。

デューイは、上述のように経験の能動的側面を強調している点で、この能動的側面を無視したイギリス経験論の経験概念から訣別し、実行的意味をもった古代ギリシアの経験概念への部分的復帰を示している。（しかし、デューイの見方は、経験と理性或いは知識を対照させなかった点で、古代ギリシアの見方とは根本的に異なっている。）

② 経験は客観的世界をも含む

「経験は、人間の活動にはいりこみ、またその活動の反応によって修正をうける純粋に客観的世界 (an objective world) を含んでいる。」——伝統的な見方では、大体において、経験は主観性にそめられた精神的なものともみられていた。

①で明らかのように、デューイの言う経験は、環境との相互作用に関する事柄であった。このことは、経験が真空の中で行なわれるのではないことを意味している。デューイによれば、経験の源は個人の外部——客観的世界（環境）にあるのであって、経験はそれらの源から絶えず養われていくことになる。従って、以上のようなデューイの経験観においては、経験の源であり、更には、人間の反応によって修正をうける客観的世界（環境）の

存在を無視することはできない。

デューイは、経験概念の再構成にあたって、近代生物学をその基礎としたばかりではない。脳と身体が神経系統によって結ばれていることを明らかにした近代生理学、心理学に依拠しているものであり、それ故に、精神と身体との機能上の連続を主張することによって、デカルト (R. Descartes) 以後の精神と物体（デカルトによれば、生物の身体もまた物体である）との二元論を排撃し、その二元論から派生する、或いはそれと関連する、精神と身体、認識と活動、主観と客観などの二元的把握を解消している。デカルト以後の哲学が、主として、その主観的傾斜によって、経験を個人の精神或いは体の内部においてのみ行なわれるものとして扱ったのに対し、デューイは経験を、経験するという行為と、その結果として経験されたものとの両者を含むもの (R. J. Bernstein) の指摘に基づく) として扱っている。それ故に、デューイは経験を、私たちが私たちの住むこの事物と人間の世界で争闘し獲得した業績として説明するのである。

③ 実験としての経験

「経験は、その生き生きとした形態においては実験的 (experimental) であり、所与を変容する努力である。経験は計画するところ、つまり未知のものへ近づいて行くところに特徴がある。」——伝統的な見方では、過去におこったことの記述や先例への参照が経験の本質とみなされていた。

デューイは、経験の原初的構造を、私たちと環境との間で行なわれる能動と受動の作用の密接な結合と捉えた。しかもデューイは、経験のこの構造は実験的であり、「すぐれた経験の上部構造を組み立てるための下部構造」³⁰⁾ と主張する。デューイによれば、経験を生き生きとした現実的形態において捉える限り、それはただやみくもに行なわれる能動と受動の単なる繰り返しなのではない。「能動的側面においては、経験は試みること (trying) である。」³¹⁾ 能動と受動の関係構造を明らかにすることによって、その能動と受動の結合は、ある一種の実験としての意味をもつことになるのであり、またその結果は、これからの活動の計画、或いは活動の結果の予測に利用される。経験は実験的であり、所与を変容する努力である、とのデューイの主張は、経験を過去への隷属とみる古代ギリシアの経験観、或いはそれを過去のものとみるイギリス経験論の経験観と比べてみると、極めて異質的なものである。これは既に述べたように、実験科学の発達という現実の経験の質に生じた変化に基づいて、経

験概念の再構成を要求しているからにはほかならない。デューイによるまでもなく、実験活動は、単に過去の経験を保存するばかりではなく、現在と未来を連絡する活動——ある仮説、予測に基づいて、ものごとを計画的に探究していく活動である。従って、このような科学の実験的な探究の方法を利用する人間の活動を、経験概念構成の背景として据えるならば、そこには、人間を単に経験の受動者、蓄積者とみる人間観に基づく経験概念とは異なった、実験的意味をもつ経験概念がうまれてくることになる。

このような「実験としての経験」観は、基本的には、デューイが実験科学の方法をモデルとしたことに由来するのであるが、デューイのこのような経験観の根底には、「経験に内在する可能性を、知的に探究し開発する典型」³²⁾としての科学の方法を人間化することによって、経験の知性化をはかろうという意図があったことも、看過されてはならないであろう。

④経験は連続性、結合性を内包する

環境との相互作用としての経験は、諸関連（連続性や結合性）を内包している。——伝統的な見方はパティキュラリズム (particularism) に陥っており、結合や連続 (connections and continuities) は経験にとって外来的なものであるとみなしている。

デューイに従って、経験を生命過程に位置づけて考えるならば、生命が生命として持続している限り、経験の過程が不断の過程であることは自明の事ではなければならない。しかし、連続や結合が経験に内在しているということは、一体いかなる構造において内在しているのか。

②で述べたようにデューイの言う経験は経験されたものを含むものであった。デューイは『確実性の探究』(1929年)において、この経験されたもの、つまり経験の対象に二重の地位があることを述べている。第一に、私たちの個人的事態は歴史の一端にほかならないが故に、私たちは経験の対象に完結的存在として反応する。すなわち、あらゆる経験された対象は、開始と終局をもったものであり、また孤立し完結したものである。しかし、それにもかかわらず、私たちは単に過去を繰り返すばかりではなく、「これから、新しくよりよい経験を構成するために、過去の経験を利用する」³³⁾のである。それ故、第二に、あらゆる経験された対象は、「後続の経験への転移、或いは後続の経験の可能性として不安定 (uncertain) である。」³⁴⁾

デューイは、経験という事実そのものが、それ自身を改善に導いていく過程を含んでいることを指摘する。彼

によれば、「すべての経験が、過去の経験から何かをひきつぎ、これから後に来る経験の質を何らかの仕方でも変容する」³⁵⁾のである。従って、デューイにとって連続や結合は、イギリス経験論の論者たちが主張するように、経験にとって外来的なものではなく、「経験された対象は、後続する諸経験の原因であり、また可能的諸手段」³⁶⁾であるという構造において、経験は連続性と結合性をもったものなのである。

⑤経験は思考を含む

経験は推論 (inference) に満ちている。「反省 (reflection) は経験に本来的であり、常に備わっている。」——伝統的な見方では、経験と思考は分離されていた。デューイの経験概念は、理性や知性と対照させられたものではない。否、理性や知性を含むものである。

デューイは、④にみたように、経験は連続性や結合性を内包したものであり、経験自らのなかに経験の改良へ進んで行く過程を含むとみなすが故に、経験に一般性や規則性をもたらすカント (I. Kant) 的な能力としての理性を不必要なもの、「伝統的な形式主義と精巧な術語に溺れた人たちの無用な創作」³⁷⁾として、経験と理性との二元観を否定する。かわって、理性を経験に位置づける。すなわち、理性を、経験を超越した観念的な能力とみるのではなく、経験の内部において、経験に知的で合理的性質を与える機能とみ、このような機能に対して、伝統的な「理性」という言葉にかえて新しく「知性」(intelligence) という言葉を用いている。

かくて、彼によれば、思考は経験のなかで動く知性の作用として経験に本来的であり、また、経験を構成する基本的条件でもある。デューイは、孤立した受動、孤立した能動のいずれをも経験とはみない。思考や推論によって、行為とその結果として生ずるものとの間の関係を認識してこそ経験とする。一つの例をあげれば、幼児が火ばちに指をいれて火傷をした場合、火ばちに手をいれるという行為と、その結果うけた苦痛、火傷との間の関係の認識が成りたつてこそ経験なのであって、そうでなければ単なる物理的変化にすぎないとみる。

森信三氏は、ロックにおける経験、すなわち、外的観察と内的観察 (反省) の後者の意味が、デューイにおいて深化せしめられ再現せしめられていることを看過してはならない、と指摘しているが³⁸⁾、この指摘からすれば、経験に思考の位置をみとめたデューイの見方は、必ずしも彼の独創によるものとはいえないかもしれない。しかし、デューイの場合、経験に思考を位置づけることが、彼の特異な「実験としての経験」観を支えている基盤に

なっていることに注意しておかねばならない。デューイがいかに経験の能動的側面を強調したところで、能動的行為の結果として生ずる受動的要素を認識し、両者の関係を明らかにする思考の動きを経験内に認めなければ、特異な「実験としての経験」観は構成されなかったであろう。

む す び

デューイは、伝統的経験概念との連続を部分的に保ちながらも、新しい特異な経験概念を提出した。本稿は、彼の経験概念の検討を目的とした筆者なりの試みに過ぎないが、(1) デューイは実験科学の方法をモデルとして、また近代生物学、心理学に依拠して経験概念の再構成を試みていること、(2) こうして提示されたデューイの経験概念は、有機体である人間が、自然環境および社会環境との間で行なう「能動と受動の作用の密接な結合」として、また諸関連（連続性や結合性）や「思考」或いは「知性」を含み、いわば「実験的」構造をもつものとして構成されていること、(3) 更にデューイのこのような経験観の根底には、科学の方法の人間化による経験の知性化という意図があったことなどが明らかとなった。

今後さらに、科学の方法の人間化による経験の知性化という角度から、デューイの教育思想に考察を加えてみたい。

註

- 1) ヘルバルト著 三枝孝弘訳『一般教育学』明治図書 1971, 81 頁
- 2) ジョン・ロック著 大槻春彦訳『人間知性論』(→)岩波書店 134 頁
- 3) ロック著 服部知文訳『教育に関する考察』岩波書店 194 頁
- 4) J. Dewey, 'My Pedagogic Creed,' in R. D. Archambault (ed.) John Dewey on Education, The University of Chicago Press, 1974, p. 434.
- 5) J. Dewey, Democracy and Education, The Macmillan Company, 1966, p. 76.
- 6) J. Dewey, How We Think, D. C. Heath and Company, 1933, pp. 201-202.
- 7) J. Dewey, Experience and Education, The Macmillan Company, 1971, p. 87.
- 8) Ibid., p. 28.
- 9) 経験概念を検討するにあたって参考にしたデューイの論文・著書は、「私の教育信条」(1897年)以後のものに限られている。
- 10) J. Dewey, 'An Empirical Survey of Empiricisms,' in Studies in The History of Ideas, vol. III, Columbia University Press, 1935, pp. 4-5.
- 11) Ibid., p. 5.
- 12) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, Beacon Press, 1972, p. 92.
- 13) J. Dewey, Democracy and Education, p. 262.
- 14) J. Dewey, 'An Empirical Survey of Empiricisms,' p. 10.
- 15) J. Dewey, Democracy and Education, p. 266.
- 16) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 93.
- 17) J. Dewey, Democracy and Education, p. 267.
- 18) Ibid., p. 267.
- 19) J. Dewey, 'An Empirical Survey of Empiricisms,' p. 14.
- 20) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 49.
- 21) Ibid., p. 93.
- 22) Ibid., p. 79.
- 23) Ibid., pp. 83-84.
- 24) J. Dewey, 'The need for a Recovery of Philosophy,' in J. Dewey et al. Creative Intelligence, Henry Hold and Company, 1917, pp. 7-8.
- 25) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 86.
- 26) J. Dewey, Art as Experience, G. P. Putnam's Sons, 1958, p. 13.
- 27) J. Dewey, The Quest for Certainty, G. P. Putnam's Sons, 1960, p. 244.
- 28) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 86.
- 29) Ibid., p. 87.
- 30) J. Dewey, Art as Experience, p. 23.
- 31) J. Dewey, Democracy and Education, p. 139.
- 32) J. Dewey, Experience and Education, p. 86.
- 33) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 95.
- 34) J. Dewey, The Quest for Certainty, p. 86.
- 35) J. Dewey, Experience and Education, p. 35.
- 36) J. Dewey, The Quest for Certainty, p. 236.
- 37) J. Dewey, Reconstruction in Philosophy, p. 95.
- 38) 森信三全集 第六巻『教育的世界』実践社 1965, 45頁

なお、本稿は、修正論文のデューイの経験概念に関する部分を要約したものである。